

令和6年度 姫路市大学発まちづくり研究助成事業

平日開催「プレイルームもくもく」

－学校に行きにくい児童への一支援－

令和7年1月

姫路獨協大学 医療保健学部 仁田研究室

仁田 静香 友國由美子

目次

I. はじめに	1
II. 研究活動の流れ	2
III. 活動概要	2
IV. 結果	4
V. 保護者、利用児を対象としたアンケート	8
保護者対象アンケート結果	8
児童対象アンケート結果	11
VI. 学生を対象としたアンケート	12
VII. 考察	
1. プレイルーム活動の目的、内容について	13
2. プレイルーム活動実施形態について	13
3. 小学校との連携について	14
4. 教育的効果について	14
VIII. まとめ	
1. 姫路のまちづくりにとってのメリット	14
2. 大学の研究者にとってのメリット（教育効果）	15
IX. 姫路市への提言	15
参考・引用文献	16

1. はじめに

文部科学省の「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」によると、令和5年度、全国の小中学校で30日以上欠席した不登校状態の児童生徒は34万6482人で、前年度と比べて約4万7000人の増加が報告されている。また、不登校児童生徒に関するものとしては、「学校生活に対してやる気が出ない」が32.2%と高く、次いで「不安・抑うつ」が23.1%、「生活リズムの不調」が23.0%と続いている。兵庫県の小中学校においても、同様の不登校児童生徒の増加の傾向が報告されており、県内の各学校に児童に応じたペースで生活できるサポートルームの設置など、学びの場の拡大を進めている。加えて、「学校に登校する」ことを目標にするのではなく、社会的自立することを目指すために民間施設の支援との連携の重要性も示されている。

姫路市では、不登校児童への支援として、総合教育センターにおいて“子供たちのありのままを認める中で思いを受け止め、心のケアをしながら対応する”適応教室が実施されている。適応教室では、個別相談の他、小集団活動が提供されており、2024年4月からは、児童やその保護者からの要望により、さらに2カ所増設されている。また民間施設のフリースクールは姫路市内で7施設あり、不登校児童が安心して過ごせる居場所の提供を行っている。

姫路獨協大学の子育て・発達障がいサポート運営委員会では地域の子育てや特別な支援が必要な方々へのサポートに取り組んでいる。学校に行くことが難しい児童を対象とした活動としては、2009年から2015年まで、姫路市内小学校の通級指導教室の活動の一つとして特別支援コーディネーターの先生方の引率により、本学プレイルームにて自由遊び活動を提供していた。この活動では児童達の欲求を充足することができただけでなく、他者との関わりを学ぶ機会にもなり、学校へ行き渋りがある児童が登校するきっかけになっていると評価された。しかし、引率に必要な人員や時間的な制限等の理由により継続が困難となり、現在は実施していない。教員による引率ではなく保護者と一緒に来所する方法であれば、本学のプレイルームを不登校児童の居場所の一つとして提供できるのではないかと考えた。

そこで今回、学校へ行きにくさを感じる児童がリフレッシュし心地よく過ごせる活動の場を提供することを目的として本学プレイルームの活動を提供し、その実施可能性を検討していく。また、小学校教諭の方々との連携の仕方を検討していくことも目的である。

教育効果としては、児童が参加するプレイルーム活動に、作業療法学科の学生も参加することにより、作業療法士に必要な対人スキル、特に子どもとの関係形成の力を身につけることができると考える。また、子どもの運動機能や認知面、対人面等の発達過程や特性に関する理解を促すことができると期待できる。

II. 研究活動の流れ

時期	活動
2024年7月～	各小学校にプレイルーム活動の案内を配布
2024年8月～12月	プレイルーム活動「プレイルームもくもく」実施
2024年12月～2025年1月	児童、保護者、参加学生に対してアンケートを実施

III. 活動概要

1. 活動名

「姫路獨協大学 プレイルームもくもく」

2. 目的

学校に行きにくい児童の平日の居場所の一つとして提供すること。またプレイルームでの活動により、気分転換や、エネルギー充足をすることを目的としている。

3. 方法

- 1) 対象：学校に行きにくく、リフレッシュやエネルギーチャージをしたい姫路市内の小学生、保護者の方と一緒に来所可能な方
- 2) 開催日：2024年8月～12月中の木曜日 計16回
- 3) 実施時間：①10:00～11:00 ②11:00～12:00 各時間帯定員3名。
- 4) 活動場所：姫路獨協大学15周年記念館内 プレイルーム
- 5) 活動内容：プレイルームにある遊具を使用し、自由な遊びを提供
例；トランポリン、ボールプール、ブランコなどの揺れ遊具、ボードゲーム、感覚グッズ遊びなど
- 6) スタッフ：教員1～2名、学生1～3名

姫路獨協大学プレイルームの紹介

プレイルームは、作業療法士や理学療法士などのリハビリテーションの専門職や看護師を目指す学生の教育施設として備えられている。将来、子どもを対象としたリハビリテーションや看護を提供できるように実習を行っている。

設備としては、子どもたちの感覚欲求を満たすために粗大活動が行える遊具、例えばトランポリンやボールプール、さまざまな形のブランコがあり、手先を使う遊具がある。また、思考するようなボードゲームや、子どもの感覚特性に応じた活動を提供できるように感覚遊びグッズやスヌーズレンルームがある。様々な遊具、道具を組み合わせ、やってみたいことに挑戦できる環境である。

—プレイルームを活用した地域連携活動—

毎月1回土曜日にプレイルームを開放し、地域の子どもたちの遊び場として提供している。障害の有無、年齢に関わらず、多くの方に利用いただいている。



IV. 結果

1) 参加者数

8月、9月の利用希望者はなかった。10月以降は数名の児童が継続して利用した。

日付	利用児童数	保護者	スタッフ
10月17日	2名	1名	3名
10月24日	1名	1名	2名
10月31日	2名	1名	3名
11月7日	2名	1名	3名
11月14日	1名	1名	3名
11月28日	2名	1名	2名
12月5日	2名	1名	2名
12月12日	1名	1名	2名
12月19日	4名	1名	2名
合計(延べ数)	17名	17名	22名

2) 参加児童の様子

児童A:

初めての利用時、緊張した様子で保護者と一緒に来所。教員と学生が出迎えると、挨拶をしながら入室する。学生から遊びの提案をすると、抵抗なく取り組み始め、徐々にほかの遊具にも関心を示し始める。自宅で過ごす時間が長く運動の機会が少なくなり、筋力低下があるとのことで少しずつ粗大運動に取り組んでいく。前かがみでトランポリンをとんでいたが、徐々に体幹を起こして跳べるようになっていく。

2回目の利用申し込みがあったが、プレイルームから他児の声が聞こえると不安が強くなり、入室が難しくなった。別室での活動提案を行ったが、他児の声は届くため利用につなげることは困難であった。そこで、他児の利用予約が入っていない時の利用を検討した。他児がいない時間帯には来所可能で、大学生のスタッフと会話をしたり、本児が提案する活動と一緒に取り組むことができていた。プレイルーム活動最終日には、児童が考案した遊びに熱中し、予想以上の結果が得られた時には、堂々とした表情を見せてくれた。

児童B:

初めての利用時より笑顔が見られ、スタッフが提案する遊びに速やかに応じていた。初日はパズルなどの静的な活動もしたが、2回目以降は高所に上ったり、揺れ遊具にぶら下がリジャンプをしたりと、粗大な活動を好んでいた。利用日数が増えると、前回した遊びをスタッフにリクエストしたり、自ら道具を持ち出して遊ぶ姿が見られた。他児に対して積極的にかかわることはないが、場所や遊具を共有することにしんどさを感じることはない様子であった。

保護者より、学校には行きにくいですが、放課後に友達と遊ぶことは楽しんでいること、体を動かすことが好きなため楽しめる場所があるとよいと話があった。

児童C:

人懐っこい表情、声掛けて、スタッフの学生に対して積極的に話しかけていた。児童の趣味や得意なことを伝えたり、学生の学業や生活について尋ねたりと、体を使った活動だけでなく、他者との関わりを楽しむ様子が見られた。また、他児と一緒に遊ぶことも希望しており、他児の来所を心待ちにしている発言があった。ただし、他児が来所したときには、まずは保護者やスタッフを介して話しかけるなど、直接関わるまでに時間を要した。

トランポリンやブランコでは、姿勢が不安定になることが苦手で、長く続けることはなかった。また当初は高所が苦手な様子が見られたが、来所が増えるごとに、自ら挑戦しはしごを登ったり、高いところから部屋を見渡すことの楽しさを感じるようになっていた。ブランコを自分で操作することができるようになると、長く乗り続け、楽しむ余裕が見られるようになった。自分の身体をうまく使いこなせるなど遊びの中での経験が、楽しみだけでなく本児の自信につながればと思う。

保護者からは、放課後に学校に行っていることや、教育センターの活動に継続的に参加しているとの話があった。

児童D:

トランポリンをしたいと目的をもって来所。スタッフからの声掛けにうなずく、首を振るなどのジェスチャーで表現し、発言はあまりなかった。トランポリンや高所へ登ることなど、動きや筋肉への強い刺激を好む傾向がみられた。利用回数が増えると、児童からスタッフに使いたい遊具や遊びの要求が増え、他児のしていることを見ながら遊び、最終日には他児と協力して宝探しゲームを楽しむ様子が見られた。

学校では感覚過敏の影響でしんどさを感じやすい状況であるが、プレイルームでは筋肉、動きの感覚充足をすることでストレスの発散につながっているようであった。保護者より、学校の先生にプレイルーム活動での様子を伝えたところ、学校にあるトランポリンをこっそり使わせてもらえるようになったとの報告があった。

<プレイルームもくもくの様子>





V. 利用児、保護者を対象としたアンケート

1. 方 法：google form を使用し、保護者、利用児童に回答を依頼した。
2. 実施時期：最終プレイルーム活動終了後 2024 年 12 月 24 日～2025 年 1 月 8 日
3. 内 容：保護者対象アンケートは、参加きっかけなど利用に関する 6 項目、実施形態に関する 12 項目とし、児童対象アンケートは、感想等の内容とした。
4. 結 果：
 - 1) 回収率：保護者、利用児童ともに 100%
 - 2) 回答内容：

保護者対象アンケート

プレイルーム利用に関する項目
① プレイルームもくもくを知ったきっかけ
<ul style="list-style-type: none">・ 教育センターの教育相談で教えてもらった。・ 教育センター内のチラシ・ 総合教育センターでチラシを見て・ 育成支援課
② プレイルームもくもくを利用しようと思った理由や目的
<ul style="list-style-type: none">・ 学校への行きづらさがあるが、体を動かすのが好きだったため、運動させたいと思った・ 子供の不登校に悩み、家にこもりがちな子供の新しい居場所を探したく思った。教育センターは安心して行くことができる場所になり、新しい居場所を作ってあげたかった・ 子どもが興味をもったため・ 子供の居場所を広げるため
③ プレイルームもくもくに参加された時や、帰宅後のお子さんの様子
<ul style="list-style-type: none">・ すごく楽しかった。もう少し遊びたかったと次回を楽しみにしている・ 毎回参加した後に、次も予約をとってとせかされた…凄く楽しくて嬉しそう・ とても楽しそうにしていました、教室にいたお姉さんにお兄さんと話せたことも嬉しい！と言っていました。・ 新しい場所に行くことができ本当に嬉しそうで、またその姿をみて私たちも嬉しかったです。
④ プレイルームもくもくを利用してよかったと思うこと

- ・ スッキリ感がみられる。
- ・ 本人も、新しい場所や新しい人間関係などの刺激を求めているので、ちょうどよいタイミングで出会えたと思っています。
- ・ 小学校に行けなくなった時に利用し始めて、もくもくを利用することで外に少しずつ出れるようになって、学校にも行けるようになりました。
- ・ 育成支援課以外にも利用できる場所があることが嬉しかったです。不登校が我が子だけではないと改めて実感出来ました。毎回親子揃って楽しい気持ちで帰れました。

⑤ プレイルームもくもくで困ったことや悩んだこと、改善した方がよいこと

- ・ 特になし
- ・ 幼少期のトラウマがあって、他の子供がいるときは教室にすら入れない。また、他の子供の姿を見るだけでもフラッシュバックしてしまい、2度目の利用からは誰もいない時に行きたい！というのが子どもの条件で苦勞しました。せっかく出会えた有難い居場所なのに、子どものトラウマに合致した利用方法が見つからない。いつも、それが悩みです。できれば、こういうケースにも対応可能な施設があれば嬉しいのに、と思います。
- ・ ありません。
- ・ 子供同士がなかなか恥ずかしくて喋れなこと。

プレイルーム活動実施形態に関する項目

① 9～12月の毎週木曜日 10:00～11:00、11:00～12:00 に実施しました。期間、頻度、時間帯は適切でしたでしょうか。

- ・ どちらでもない
- ・ どちらでもない
- ・ どちらでもない
- ・ よい

<理由>

- ・ 午後からもあると嬉しい
- ・ あらゆるケースの子どもに対応しようと考えれば、固定しすぎると利用が難しくなる。例えば、昼夜逆転など。
- ・ 利用しやすい時間帯だった

② 事前 web 申し込みとしました。申し込み方法は適切でしたでしょうか。

- ・ よい
- ・ よい
- ・ よい

<ul style="list-style-type: none"> ・ よい
<p><理由></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 空き状況が確認できるため ・ あらかじめ、利用者の人数が把握できるから
<p>③ 定員を各時間3名としました。定員は適切でしたでしょうか。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ よい ・ どちらでもない ・ よい ・ どちらでもない
<p><理由></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ おもいきり体を動かせた ・ 複数が苦手な子供には3人でも多かった
<p>④ スタッフとして本学学生が活動に参加しました。学生の参加は適切でしたか。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ よい ・ よい ・ よい ・ よい
<p><理由></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 恥ずかしかったみたですが、遊んでくれて嬉しかったようです。 ・ 彼は、自分の境遇を理解してくれる人を探している。特殊な子供の反応を理解してくれる大人に安心感を得られた ・ 子どもがお兄さん、お姉さんを気に入っていたため
<p>⑤ 活動内容は、計画をたてずお子さんの自由な活動を実施しました。活動内容は適切でしたでしょうか。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ よい ・ よい ・ よい ・ よい
<p><理由></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 好きなように動けたので良かった ・ 自主性が大切なので、自由にできる空間で思い思いに活動してほしいからちょうどよかった。 ・ やりたいことをやらせてくれたため
<p>⑥ 今回、学校との連携は実施していませんでした。利用時のご様子などを学校に伝えるといった連携について、ご意見をお聞かせください。</p>

<ul style="list-style-type: none"> ・ そうしてもらえるとありがたいです。 ・ 学校に行きたいけど行けない。そんな彼の状況を、学校の先生に伝えていただけるとは、私も有難いです。やはり、現場を見ていない学校の先生には親から伝えることは難しいし、専門の先生方から伝えていただくことで安心します。 ・ 私から学校の先生に活動の様子など伝えていたので、必要性はあまり感じませんでした。 ・ 学校に限らず療育先や育成支援課なども連携出来れば嬉しいです。
<p>⑦ 今後このような活動に求めること、期待すること、もしくは改善すべきことなどありましたら、ぜひ、ご意見をお聞かせください。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 週2ぐらいであればうれしいです。 ・ 子供にとっても親にとっても有難い環境です。義務教育なのに学校に行けない子供が過ごせる場所がなさすぎて、親としても不安に思うし困っていました。こういった場所を、たくさん増やしてほしいし、できればひとりひとりの環境にあった対応ができる場所、時間、人員を確保できるよう、公的機関にかけあってほしいと思います。 ・ 学校に行きづらくなっている子が活動できる場所が色々あれば、子どもも親も救われると感じます。 ・ 続けて欲しい。

児童対象アンケート

①-1 プレイルームのかつどうはたのしかったですか？
たのしかった 100%
①-2 プレイルームでたのしかったことをおしえてください。
<ul style="list-style-type: none"> ・ トランポリン ・ トランポリン、ブランコ
②-1 プレイルームではあんしんしてすごせましたか？
安心していた 75% やや安心していた 25%
②-2 ふあんだったことがあれば、おしえてください。
<ul style="list-style-type: none"> ・ ほかに子供がいると緊張する ・ 同じ部屋に子供がいたこと
③-1 プレイルームであそぶことで、きもちやきぶんはスッキリしましたか？
すっきりした 100%
③-2 そのようなきもちになったりゆうがあれば、おしえてください。

<ul style="list-style-type: none"> ・ 運動できたから ・ 自分の部屋とは違って、気分転換できた
④ プレイルームのかつどうで、すきなことをおしえてください。
<ul style="list-style-type: none"> ・ コロコロに乗って動き回る ・ トランポリン、ブロック、お兄さんとお姉さんとはなすこと ・ 丸いブランコ
⑤ プレイルームのかつどうで、にがてなことをおしえてください。
<ul style="list-style-type: none"> ・ ない ・ 誰かほかの子供と同じ部屋になること
⑥ なんでもじゆうにかいてください。
<ul style="list-style-type: none"> ・ 行ける日がもっとあってほしい ・ 楽しかったからまた行きたいよ。ありがとう。またお兄さんやお姉さんと話したい。遊びに行けないの？ ・ また行きたいです

VI. 学生を対象としたアンケート

1. 方 法：google form を使用し、参加学生 2 名に回答を依頼した。
2. 実施時期：最終プレイルーム活動終了後 2024 年 12 月 24 日～2025 年 1 月 8 日
3. 内 容：参加を通して感じたこと、学んだことに関する内容とした。
4. 結 果：
 - 1) 回収率：50%
 - 2) 回答内容：

① この活動は学校に行きにくい児童を対象として実施しました。ご利用の児童との関わりにおいて、感じたこと、思ったこと、学んだことを教えてください。
<ul style="list-style-type: none"> ・ 初めは緊張していたり、不安もあったりしていたが、色んな遊びを提案して遊んでいるうちに少しずつ話してくれるようになって、帰りには「また来たい」と言ってくれていたのが良かったと感じた。学校だけでなく今回のような場所からでも楽しい場所、楽しみな活動と思える事が増えたらいいなと感じました。
② 保護者との関わりはありましたか。保護者との関わりで、感じたこと、思ったこと、学んだことを教えてください。
<ul style="list-style-type: none"> ・ 学校へはなかなか行きにくくても、本当は運動が好きだったり、話すことが好きで、私たち大学生と遊んだり話したりする中で、子どもさんの様子を見て保護者の方も自然と笑顔になっていた様に感じた。

Ⅶ. 考察

1. プレイルーム活動の目的、内容について

今回、学校に行きにくい児童を対象に、平日の居場所を提供すること、またプレイルームにて活動することにより、気分転換や、エネルギー充足をすることを目的として、「プレイルームもくもく」を実施した。活動に参加した児童や保護者からのアンケートでは、“子どもの新しい居場所を広げること”や“子どもが興味を持った、子どもが好きな運動ができること”を目的に利用を希望され、利用後の子どもの満足度は高く、保護者からも“楽しく、嬉しそう”との結果が得られた。学校に行きにくい児童といっても、学校に行くことができない児童や、別室登校であれば過ごすことができる児童、特定の時間であれば出席できる児童などさまざまである。今回利用した児童も、週に数回登校している児童から、放課後に先生との面談目的で学校に行っているといった児童まで、児童の状態は異なっていた。ようやく外出ができるようになってきた児童にとっては、家庭以外に安心して過ごせる場所として活用され、学校に行っているがしんどさを感じる児童にとっては気分転換、リフレッシュの機会となり、各自の目的に合った過ごし方を提供できたのではないかと考える。少ない利用者ではあったが、このような活動に対するニーズがあることを再確認できた。

2. プレイルーム活動実施形態について

プレイルーム活動を知ったきっかけについては、“教育センター、育成支援課の方からの紹介”のみで、小学校経由での利用はなかった。育成支援課に相談するという行動を起こすことができる保護者には学校以外の施設や居場所の情報が届くが、そうでない場合、情報を入手することが難しくなる可能性があると考ええる。在籍学校など入手しやすいところから、学校以外の居場所の情報も提供され、各自が選択することができるというのではないかと考える。

利用申し込み手続きに関しては、web申し込みが有用であった。学校に行きにくさを感じる児童にとって、慣れていない場所で他児と過ごすことは負担が大きくなることもあり、予約状況を確認し利用を検討できる点が有用であった。3名と設定した定員については、保護者の意見がわかれ、50%が“よい”、50%が“どちらでもない”の回答であった。3名を少人数と捉えて“思い切り体を動かすことができた”とのよい理由があったが、一方で、“複数が苦手な子どもには3人でも多かった”との意見もあった。少人数と捉えられる人数でも不安、負担が大きい場合があることを理解し、個別に対応できる時間を設けることも検討していきたいと考える。

実施頻度について、木曜日の午前中に1時間×2回の実施とした。保護者からは児童の“生活リズムに応じて利用できるとよい”とのことで午後の開催や、“週2回”など実施回数を増やす要望があった。ニーズに対応したい思いはあるが、そこで課題となるのは、スタッフ側のマンパワーである。スタッフとして大学の教員が1~2名、学生も1~2名が参加していたが、他業務や授業との兼ね合いで、現行以上に回数を増やすこ

とが難しい状況である。定期的な実施は週1回とし、児童のニーズによって個別な不定期に実施することを検討していく。

本学学生が活動に参加したことについては、保護者全員が“よい”との回答で、学生の関わりによって、“遊んでくれることがうれしい”気持ちになったり、“子どもの反応を理解してくれる大人に安心感を得られる”との意見があった。当初は緊張していた学生も回数を重ねることで、適度な距離感で接し、児童のやりたいことを尊重した関わりをすることができ、児童とも心地よい関係となったと考える。また、活動中に児童が大学生活の話を探る様子も見られ、児童が将来を想像するきっかけになっているようにも思われた。対子どもとは緊張しがちな児童にとって、保護者とは立場が異なる大人からの関わりが安心できる居場所作りにつながったのではないかと考える。

3. 小学校との連携について

在籍する学校との連携については、今回、短期間の実施で利用頻度も安定していなかったことより、学校との連携は行っていない。保護者の中には“学校の先生に活動の様子などを伝えていたので必要性は感じない”との回答もあったが、その他は“現場を見ていない学校の先生に親から伝えることは難しいため伝えてもらえると安心する、学校に限らず療育先なども連携できるとうれしい”との回答があった。保護者が学校で報告されたことにより、校内で児童が好きな活動を提供してもらえるようになるなど、学校の対応に変化がみられた。このようにプレイルーム活動時に児童が見せる表情や行動、リフレッシュポイントなどを共有することにより、学校の環境や、支援についても広がりが見られる可能性がある。まずは、適切な情報共有、連携がはかれるように、学校の先生方が求める内容を確認し、情報共有の方法も検討していく必要があると考える。

4. 教育的効果について

1名の学生からの意見ではあるが、児童の変化に気づいたり、保護者との話で児童の気持ちへの理解が深まる経験をすることができ、有意義な時間となっていた。今後、人と関わる業務に携わるものとして、他者のいろいろな思いや価値観を知ることができたことや、児童から保護者まで幅広い年齢の人とコミュニケーションをとることができたことは、学生自身の考え方に気づいたり、対人技能を高めるための貴重な機会になったと考える。

VIII. まとめ

1. 姫路のまちづくりにとってのメリット

短期間の実施であったが、学校に行きにくい児童が安心して、リフレッシュして過ごす場所、時間を提供することができた。学校に行きにくい児童は、学校という社会の中で不安を感じ、さらに皆と同じようにできていないという思いから後ろめたさを感じやすく、安心できる家庭で過ごす時間が増えると言われている。そのため、まずは学校内や公的機関、民間施設などを含め、安心して過ごせる場所を確保することが大切である。今回のプレイルーム活動では、児童は自分で遊びを選んで決定したこと、スタッフや保

護者は達成できるようにサポーターに関わったこと、また他児と一緒にいることを求められなかったことにより、安心できる居場所となったのではないかと考える。また、体を大きく使った活動を行うことにより、感覚、運動面の欲求が満たされ、リフレッシュにつながったと考えられる。よって、このプレイルーム活動が地域資源の一つとして有用であったと考える。

2. 大学の研究者にとってのメリット（教育効果）

先にも述べたが、この活動に参加した学生は、保護者や児童の気持ちを理解する経験ができ、繰り返し関わることで関係を築くことができている。近い将来、作業療法士として支援が必要な人と関わるうえで、対人技能を身に着けることはとても重要なことである。実際に児童と保護者と関わることで、そのような経験をできたことは学生にとって貴重な機会であった。

IX. 姫路市への提言

保護者の発言で印象的なものがあった。「不登校支援で少人数制の活動を提供されているところがあるが、我が子にとっては、5人でも、3人でも多く、同世代の子どもと場所、時間を共有することができない。部屋に閉じこもりがちだった状態から、家の中で移動できるようになり、家の外に出られるようになり、そして限られた空間の車の中で過ごすことができるようになるなど、段階的に活動が広がってきているが、そこからのステップの場がない。家の外で、児童一人で過ごせる場がないため、そのような支援があると助かる」とのことであった。

姫路市では適応教室にて少人数制の活動を実施されている。今回のプレイルーム活動を通して、適応教室に参加するまでの段階にいる児童への支援を担えるのではないかと考える。実施方法としては、今回の定員3名のプレイルーム活動に加え、個別に対応する時間を月2回程度設定し、利用いただくというものである。ただしそれを実行するためには、学内での協力体制を整える必要がある。地域にこのようなニーズがあることを周知することで、教員や学生の協力を得る必要がある。

不登校の予防的対応として、小学校からのニーズがあり、協力が得られるのであれば、2015年まで実施していた小学校通級学級の活動としてのプレイルーム活動を再開していきたい。継続が困難となった理由としては、通級学級の教員や引率教員のマンパワーの不足や、業務の増加、大学に来校するための交通費がないことが挙げられていた。児童や教員のニーズの有無の確認が必要であるが、プレイルーム活動が登校のきっかけになる可能性は高く、姫路市に上記内容への対応を検討いただきたいと考える。

謝辞

本研究にご協力くださいました総合教育センター育成支援課の皆様、活動に参加された児童、保護者の皆様には心より感謝いたします。なお、本研究は令和6年度姫路市大学発まちづくり研究助成を受けて実施したことを付記する。

参考・引用文献

文部科学省初等中等教育局，令和5年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について https://www.mext.go.jp/content/20241031-mxt_jidou02-100002753_1_2.pdf （2025年1月22日最終アクセス）

文部科学省 令和5年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果及びこれを踏まえた対応の充実について（通知）
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1422178_00005.htm （2025年1月22日最終アクセス）

浜内彩乃・田附紘平（2024）．不登校児童生徒における居場所支援の重要性についての一考察－「個性」と「みんなと同じ」を巡る葛藤に着目して－，名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学 70、37-43

笠井孝久（2021）．不登校児童生徒に対する支援を再考する 千葉大学教育学部研究紀要 69、73-76

令和6年度 姫路市大学発まちづくり研究助成事業

平日開催「プレイルームもくもく」
—学校に行きにくい児童への一支援— 報告書

令和7年1月 発行

仁田研究室 (姫路獨協大学)

仁田 静香	医療保健学部	講師
友國由美子	医療保健学部	講師